

# 草庵仏教

第182号  
(発行日)  
2005年8月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX  
(0798) 63-4488  
(発行人) 土井紀明  
address---kousien2720kimyou@ze  
us.eonet.ne.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》  
○〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....  
○〈念仏座談会〉  
毎月2日および12日  
午後3時より。  
○真宗共学会---毎月第1と  
第3木曜日の午後7時より。  
\*8月22日同朋の会および8  
月12日念仏座談会は休みます

## 真宗問答⑬ 罪悪深重の身

- U 「先回、弥陀の本願は、阿弥  
陀仏が一切の生きとし生けるも  
のを仏陀たらしめたいと願われ  
て起こされた(我が名を称えよ、  
浄土に生まれしめん)という誓  
願でした」
- D 「ええ」
- U 「この願は一切衆生を平等に  
救いたいという広大な誓いであ  
り、その為に弥陀は五劫とい  
う長き思惟を重ね、永劫と言わ  
れる御修行を私どもに代わって  
上げて下さったのですね。この  
大悲のおはたらき一つによって、  
一切衆生は浄土に生まれて仏に  
なることが出来るといういわれ  
でした」
- D 「ええそうです」
- U 「なぜ阿弥陀仏はこのよう  
な願を起こし私たちに代わって御  
修行を成就されたのでしょうか」
- D 「それは私たちが罪悪深重の  
凡夫であつて、清浄の心もなく、  
真実の心もなく、まことの信心  
もないからであります。こうし  
た人間(衆生)の本性を徹底的  
に知りたもうたのが弥陀なので  
す。その罪悪深重の人間を見捨  
てず、除かず、浄土に生まれし  
めたもう阿弥陀なのであります」
- \*  
U 「私はなかなか自分を罪悪深  
重の者とは思えません」
- D 「私も自分を罪悪深重の人間  
と本当に感じていないかと言え  
ば、それほど感じていないので  
す。それほど感じていないので  
す。おほずかしいことです。でも私  
は罪悪深重の凡夫ではないかと  
いえば、決してそうではなくて、  
罪悪深重の凡夫だと思っていま  
す」
- U 「罪悪深重の者と感じていな  
いのに、罪悪深重の凡夫と思  
うといわれるのはどうですか」
- D 「私が極悪人であり罪悪の  
深重な者であるというのは、私  
が深く罪悪を感じているから  
ではありません。仏様が私ども  
を(罪悪深重の者よ)と仰せ下  
さるので、それが私の姿なのだ  
と信じているのです。自分には  
自分を罪悪深重とまではとても  
感知できなくても、仏様が罪悪  
深重の凡夫と仰せられているの  
ですから、私はそういう人間だ  
と思わせていただき信じさせて  
いただいているのです」
- \*  
U 「では仏様が人間をどのよう  
に見ておられるのか、経典では  
どう説かれていますか」
- D 「大無量寿経では三毒五悪段  
に詳しく説かれています。私  
はことに阿弥陀仏の前身である  
法蔵菩薩様が私どもに代わって  
ご修行下さったことが説かれて  
いる大経の勝行段の個所に、私  
たちがどういう人間であるかを  
お知らせ下さっていると思いま  
す。この個所は仏の眞実性とと  
もに人間の不眞実性(罪悪性)が  
露わにされていると思います」
- U 「勝行段ではどのように説か  
れていますか」
- D 「次のように説かれています。  
欲覚・瞋覚・害覚を生ぜず、欲  
・声・香・味の法に着せず。忍  
力成就して衆苦をはからず。少  
欲知足にして、染・恚・痴なし。  
三昧常寂にして、智慧無碍なり。  
虚偽諂曲の心あることなし。和  
顔愛語にして、意を先にして承  
問す。勇猛精進にして、志願も  
のうきことなし。専ら清白の  
法を求めて、もって群生を恵利  
しき。三宝を恭敬し師長に奉事  
して、もろもろの衆生をして  
功德成就せしむ」
- (貪りの心や怒りの心や害を与  
えようとする心をおこさず、ま  
た、そういう思いを持つてさ  
えなかった。すべてのものに執  
着せず、どのようなことにも耐  
え忍ぶ力をそなえて、数多くの  
苦をものともせず、欲は少なく  
足ることを知って、貪り・怒り  
・愚かさを離れていた。そして  
いつも三昧に心を落ちつけて、  
何ものにもさまたげられない知  
恵を持ち、いつわりの心やこび  
へつらう心はまったくなかつた  
のである。表情はやわらかく、  
言葉はやさしく、相手の心を汲  
み取ってよく受け入れ、雄々し  
く努め励んで少しもおこたる  
ことがなかった。ひたすら清ら  
かな善を求めて、すべての人々  
に利益を与えた。仏・法・僧の  
三宝を敬い、師や年長のものに  
仕えたのである。大きな願いを  
持つてさまざまな行を修めて、  
すべての人々に功德を与えたの  
である)
- 私たちに代わってされたこれ  
らの修行は、私たちがこういう  
行をなしえないばかりか、法蔵  
菩薩が消してくださるねば消え  
ない多くの煩惱に染まっている  
私であることが照らし出されて  
います。欲覚や欲想は欲望、瞋  
覚や瞋想はいかりの心、害覚や  
害想は他のものを傷つけようと  
する心です。常に外に何かを欲  
求している身心、そして自分の  
都合の悪いことには不満や不足  
や苛立ちや怒りや憎しみやねた  
みの心を持ち、さらに邪魔な人  
に対しては苦痛を与えたいよう  
な心根を持ち続けている、そう  
いう人間が見られ、しかもその  
人間がこうしたおぞましさをど  
うすることも出来ず、浄化する  
ことも出来なくて苦悩の人間  
が露わになっていると思いま  
す」
- U 「衆生救済のためになされた

法蔵菩薩のご修行のお姿によって、逆に衆生の本質、人間の本性が知らされるのですね」

D「ええそうです。大無量寿経にはほかに三毒五悪段などの仏陀の教説を通して、衆生の本質が明かされています。そういうことを浄土の祖師方は感得されたのです。ことに善導大師は深く人間の本性を自覚されました。その伝統を受けて親鸞聖人は人間の本质を徹底的に洞察されました」

\*

U「そのことで親鸞聖人はどのように仰せられていますか」

D「聖人は『教行証文類』の信巻にこう述べておられます。

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念・一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。

(現代語訳)―すべての衆生は、はかり知れない昔から今日この時にいたるまで、煩惱に汚れて清らかな心がなく、いつわりへつらうばかりでまことの心が無い。そこで阿弥陀仏は、苦しみを悩むすべての衆生を哀れんで、はかり知ることができない長い間菩薩の行を修められたときに、その身・口・意の三業に修めら

れた行はみな、ほんの一瞬間も浄らかでなかったことがなく、まことの心でなかったことがない)

衆生に清浄真実の心がない、それゆえ法蔵菩薩は清浄真実の修行をされたのだと仰せられています。だから大経に、法蔵菩薩が清浄真実の心で修行をされて、その功德を衆生に与えられるという仏説は、私も衆生の方に清浄真実の心がないからだと聖人は仰せられるのです」

U「人間に浄らかな真実の心がないから、無始よりこの方、流転してきたのが我等衆生であること、そしてその衆生を大悲して、救済に立たれたのが阿弥陀仏なのですね」

\*

D「ええそうです。このようにして法蔵菩薩は自らのなせし修行の徳を南無阿弥陀仏として私たちに成佛の因として与えてくださるのですが、ところが衆生はこの南無阿弥陀仏を信受する心、それがまた無いのです。私たちは虚仮不実の心しかなないので、浄らかな信心(信樂)も無いのです。ですから与えてくださる南無阿弥陀仏を真に受け取ることが出来ないのです」

U「要するに私たちは南無阿弥陀仏(本願の名号)を受け入れる心が無いほど罪業が深いのですね」

D「ええそれを聖人は一切群生海、無明海に流転し、

諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂なし。法爾として真実の信樂なし。ここをもつて無上功德、値遇しがたく、最勝の浄信、獲得しがたし。

(すべての衆生はみな煩惱を離れることなく迷いの世界に輪廻し、多くの苦しみに縛られて、清らかな信樂がない。本来まことの信樂がないのである。このようになわけであるから、この上ない功德である名号に会うことができず、すぐれた信心を得ることができないのである)

と述べておられます。こういう人間の罪を謗法ともいい闡提ともいわれるのです。謗法とは仏法をそしり仏法を聞こうとしない罪であり、闡提は仏法を信じることのできない罪であります。人間が救われたいのは押し詰めてみると、謗法・闡提の罪をもっているからだとお示しになっているのです」

U「私たちはいわゆる大涅槃というサトリに至る行(徳)もなければ、信もない。仏になる種ばかりを作っているような人間なのですね」

D「そうなのです。それが私たちのありのままの姿だと」

U「そうすると助かる道はないのでしょうか」

D「実はこういう私たちの姿です。如来法蔵様は大悲したまいました」

\*

U「信心をどのようにして与えて下さるのでしょうか」

D「信心とは、信とはまことと、いわば真心であり真実心です。真心とはまごころであり大悲の心です。ですから信心の本質はまごころとしての如来の大悲心であり、真実心です。この如来の大悲の心が私たちに届いて信心となつてくださるのです」

U「如来の大悲の心が私に來たつて名号を信じる信心としてはたらいて下さるのですね」

D「そうなのです。もう少し実際にそくしていいますと、念仏往生の願は(助けるで、我が名を称えよ)であります。阿弥陀仏は(我が名を称えよ)と、私に名号を与えてくださり、念仏申す身にしてくださいます。そして、この(我が名を称えよ)には同時に極めて大いなる慈悲心がこもっており、阿弥陀仏は大悲のまごころでもって、私どもに名号を与えて下さるのです。これを『浄土文類聚鈔』には如来清浄の真心をもつて、諸有の衆生に回向したまへり。

といわれ、如来は真実清浄の慈悲心でもって、衆生に名号を回向(与えて)して下さるので、ですから私たちが大悲のこもった念仏をいただくことは大悲の真実心をいただくことになり、これが私どもの真実の信心となつて下さるのです。です

から『浄土文類聚鈔』には信樂、すなわちこれ、真実心をもつて信樂の体とす。

といわれ、信樂(信心)の本身は如来の真実心だと聖人はお示しになるのです」

U「我が名を称えよ、必ず助けらる」の本願を聞いて、念仏申す身になるのですが、誓いの御名(念仏)を、大悲をこめて与えて下さるのですね。だからお念仏を称えて、そのいわれを聞いていくことにおいて如来のかぎりなき大悲を感じざるを得なくなるのですね」

D「そうなのです。いただいて称える念仏において(汝を助ける)という大悲が届き、私の中から起こしえない信心が不思議にも私の上に発起するのです」

U「そうするとお念仏も信心もともに如来よりたまわるのですね」

D「ええそうです。ですから、そのことは裏から言えば、私たちが全く仏因(徳)もなければ、その仏因をいただく信心もない、それこそ出離の縁あることなき罪悪深重・煩惱具足のいたずら者であることを逆に照らし出され、教えられるのです」

U「自分が罪悪深重の凡夫であるという事は、単なる自己反省のよって知れることではなくて、本願の大悲に照らし出されて知らされるのですね」

D「ええ、そうなのです」(了)

# 歎異抄

## 後序第二講

親鸞、御同朋の御なかにして、御相論のことそうらいけり。そのゆえは、「善信が信心も、聖人の御信心もひとつなり」とおおせのそうらいければ、勢観房、念仏房などももうす御同朋達、もつてのほかにあらそいたまいて、「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、ひとつにはあるべきぞ」とそうらいければ、「聖人の御智慧才覚ひろくおわしますに、一ならんともうさばこそ、ひがごとならぬ。往生の信心においては、まったくことなることなし、ただひとつなり」と御返答ありけれども、なお、「いかでかその義あらん」という疑難ありければ、詮ずるところ聖人の御まえにて、自他の是非をさだむべきにて、この子細をもうしあげれば、法然聖人のおおせには、(続)

(歎異抄後序より)

### 【語釈】

勢観房―平重盛の孫で、1才<sup>3</sup>で出家し、法然の弟子となつて、8年間師に仕えた。6才(一二三八年)没。  
念仏房―もとは天台宗の学僧であつたが法然の弟子になつた。嵯峨の往生院を創建。9才(一二五一年)で没。

### 【現代語訳】

(あるとき、親鸞聖人と同門のお弟子方との間で、信心をめぐつて論じあわれたことがありました。

といいますのは、親鸞聖人が、「この善信の信心も、法然聖人のご信心も同じである」と仰せになりましたところ、勢観房、念仏房などの同門の方々が、意外なほどに反対なさつて、「どうして法然

聖人のご信心と善信房の信心とが同じであるはずがあるうか」といわれたのです。そこで、「法然聖人は智慧も学識も広くすぐれておられるから、それについてわたしが同じであると申すのなら、たしかに間違いであろう。しかし、浄土に往生させていただく信心については、少しも異なることはない。まったく同じである」とお答えになつたのですが、それでもやはり、「どうしてそのようなわけがあるうか」と納得せずに非難されますので、結局、法然聖人に直接お聞きして、どちらの主張が正しいかを決めようということになりました。)

\*

聖人が師の法然聖人のもとに居られたのは聖人<sup>2</sup>9才から流罪にあわれる<sup>3</sup>5才までのおよそ6年間でした。その頃は聖人は善信(善信房)と申されていきました。ある時、法然聖人のお弟子である同門の勢観房や念仏房などと信心について論じあわれたことがありました。それは聖人が「私の信心も法然聖人の信心も同一の信心である」と仰せになり、それに対して勢観房や念仏房などが「どうして法然聖人の信心と善信房の信心とが一つであるうか」と反対され、それに対して聖人が「法然聖人の智慧や学識で信心をはかつて、私の信心も法然聖人のご信心も同一であるというのなら、たしかに間違いであるけれども、往生の信心においては異なることはない」とご返答されたのでした。それでも納得できないということで、直接法然聖人の所にいって、お尋ねしたところ、法然聖人は「ともに如来からたまわつた信心である。もし別の信心であれば私と同じ浄土に往生することはないのである」とお答えになつたと言

ことです。

\*

真宗においては、人はそれぞれ違つても信心の内容は同一であるといふのがきまりである。ではなぜ同一なのであるうか。あるいは逆になぜ同一ではなくて異なつた信心になりかねないのであるうか。この問題は現代の真宗人のことにゆるがせに出来ない大きな問題である。真宗の信心は弥陀の第十八願を信じる信心である。(信じる)とは第十八願の仰せを仰せのままに受け入れていることなのである。本願の仰せは万人に平等であるから、仰せのままに信順する信心は同一である。

ところが同じように本願を信じ念仏申す、すなわち同一の本願を信じ、同一の念仏を申しながら、申す人間の姿、能力、性格などの人間的個人的差異によつて、人が違つたと信心が異なるように思つてしまふ。法は平等であり同一であつても、法をいただく人間が違えば、信心も違つてしまう。独身で戒律を保っている清僧の念仏の信心は、家庭を持ちつつ世俗の仕事をする人の念仏の信心とは違つてうに感じてしまふ。それは称えられる念仏(南無阿弥陀仏の名号)は同じであつても、称える人の心が違つと、念仏を信じる信心が違つてうに思つてのである。ところが念仏を称える人の心はさまざまである。千差万別であつて、善悪・智愚・性格、知性など別々である。だから称える人の心によつて念仏の信心に違いがあると思つてしまふのである。

しかし、それは念仏の信心は人の心から出てくる、あるいは人の心の中で信心を作るように思ふからである。ところが信心は「月かげの いたらぬさとは

けれども ながむる人の ころにぞすむ」で、たとえば10人の人が夜空に浮かんだ月を仰ぐ。そうするとそれぞれの人の眼に月の光が届いて、月が宿る。月の光は、その人がどんな品性の人かを選ばない。平等に人の眼に月影が宿る。それは全く月の光の働きである。人の心はいかようなりとも、一人一人が「助けるで我をたのめ」という大悲の仰せの月を仰ぐとき、その人がどんな心をもつていても、その心の上に月の姿(信心)は宿るのである。月の光を仰ぐ人が、善人であろうと、悪人であろうと、学者であろうと無学な者であろうと、鋭敏な者であろうと愚鈍な者であろうと、女であろうと男であろうと、同じ月の光を仰いでいるのである。その人の姿や特性によつて、仰がれているもの(月の光)に変わるものもなく異なるものでもない。同じ月の光が、人の眼に届いているのである。本願の仰せは「つだから、同一の本願が届いて信心となる、その信心は同一である。(了)

## 《盂蘭盆会法要》

8月16日(火)  
午後2時始まり

\*8月22日の「同朋の会」は休みます。